神隠し

白沢　一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神隠し

【Ｎコード】
Ｎ８０８５Ｆ

【作者名】
白沢　一

【あらすじ】
やさしい少年のお話。友達はいない、ただみんなが楽しんでいるところを見ているだけで幸せになれる。

少年期（前書き）

一時的な感情で書いてみた、後悔はしてない。

少年期

摩訶不思議なことが時代を通して時に人々を驚かせたり、希望や絶望を与えたりして楽しませてくれる娯楽の一つとなった。
主に霊魂やマジックといったものがその部類に入るだろう。
それが今では人間関係をより深く築くために親しんできた人との気さくな話題の一つとして容易に取り入れられていることを感じる。
それが嘘か真実は対して重要ではないように、その手が作られた物語は大抵は夢が詰まっていて、心地よい気持ちにしてくれる。
この小説もその一部として人々を楽しまれることができたのなら、作者にとってこの上ない幸せなことと思う。
この物語は普通の人と一つだけ、たった一つだけ違う目を持った一人の男の子の暖かくて切ない物語である。

神隠しというものをご存じだろうか、街や里から前ぶれもなく忽然と姿が消えてしまう超常現象を意味する。
それに遭った者は、突然戻ってくる者、無惨な死体となって街や里に帰ってくる者、二度と帰ってこない者など様々である。
また無事に生還したとしても、どうして戻ってこれたのか、何故忽然と自身が消えたのかを覚えていない者が大半だった。
何かに脅え、事件の起こった時間の隔たりも定かではなく、心因的に精神が不安定な者ばかりである。
神隠しに遭ったという者の中には成人の男性ばかりではない、幼い

子供や女性も被害に遭っている事件も少なくない。
ただ、こういった事件に共通していることとして挙げられることが一つだけある。
被害に遭った者の身の回り、あるいは親族の中に突然変異によって赤い瞳孔を持った人物の存在があるということだけである。

ここは養護施設。
ここにいる子供たちの多くは親の顔をまだ知らない。覚えている子供も稀には中にいるが、幼いゆえにぼんやりとしか顔が思い付かない。当然両親の写真も持っていなく、ここで世話を焼いてくれる保母さんと一緒にいる時間の方が遥かに過ぎている。
ここは色々な子供たちが住んでいる。誰にでも人懐こくて陽気な子供、手にを得ない程やんちゃな子供、自分を解ってほしくて仲間に入ろうとするがうまく表現ができなくていつも悩ましげな顔をする子供、気ままに一人で自分の時間を過ごす子供、正に十人十色。
ノアはその中で一番最後に紹介した子供たちの分類に入るだろう。
いや、気ままという言葉だけは該当しない。
人見知りが激しくて人との関わりが苦手という訳でもなく、むしろ人を思うが故に他人を最優先して自分を二の次においてしまう程、優しくて愛しむことを知っている子供だった。
それが人に愛されたいがために培われた精神なのか、人に無視されることの辛さを知った寂しい気持ちがそうさせているのか、幼いノアにはまだ自分自身を理解できない。
ただここにいる子供たちに共通していることとして、親に十分に甘えることができなかったことでさみしがり屋な子が多い。
ここへくる大人に対してはほぼ無警戒にすぐ甘える行動を示す。そんな子供たちばかりだ。
生まれた国も人種も関係なく、訪れる大人たちは親のいない子供た

ちの全てに心を許す。
しかし、ノアに対してだけは何故かここで長居する大人たちは大抵普通の子供とは違う言動を示してくる。
甘えようとして近寄って行ったとしても、大人たちはノアを遠ざける傾向があった。
それに対してのノア自身の自分なりの解釈は、唯一周りの子供とは目の色が少し違う、真っ赤な目をしているから大人たちはそれを不気味に思うのだろう位であった。
ノアも他の子供たちとは違う反応を示す、自分に対しての大人たちの言動にうすうす気づいていた。
ただ、青い目をした子も少なくないはずなのに、何故赤い目をしたノアだけは厭われるのか本人には分からない。
もう一つ、ノアには他の子たちとは決定的な違いがある。
それは本人にとってはごく自然のことで、他の人にもその能力が備わっているものだと誤解を招いていた。
目を閉じていると、自分から見る主観的な角度からの視界とは全く違う、ありえない角度からの視界が脳裏に飛び込んでくる。
たとえそれが自分の背後、床の下、物質の中、頭の上でも、それは見える。
おそろしいことは、それは空想(フィクション)ではなく、現実(リアル)で起きた次元の出来事なのである。

今日は空が澄んでいて少し肌寒い気候だ。
空気は乾燥していて肌をピリピリと引き締める。
大広間に入ってストーブで温まりたい気分だけど、今は掃除の時間。
ほとんどの窓やドアは開けられて、室温は外と変わらない。
ストーブも当然消されている。
かき集めた落ち葉でサツマイモを焼きながら暖をとりたい。
そう思いながら徐に座り、ノアははしゃぐ他の子供たちを眺めてい

た。
しばらく観察していると、遊んでいる子供たちが色んなことで遊んでいることに感心が湧いてきた。
観ている限りでは、きゃっきゃと高い声を上げながら楽しそうに友達同士で鬼ごっこをする子、毛糸を輪にして綾取りをする子、御飯事をする子、、生えている草をむしる子さえいる。
不思議にやっていることはそれぞれ違うはずなのに、ただ同じ広場にいて座って眺めているだけで楽しさが伝わってなぜか幸せな気持ちになる。
冷えた頬をさっきまでポケットに入れていた両手で温めながら、ノアは自分の時間を楽しんでいた。
この時間がいちばん幸せ。
いつもよりゆっくりと時間が流れる。
この開放的な空間でみんなが遊んでいるだけで心が落ち着く。
みんなの楽しげな声も、時々通る風の音も僕にとってはちょうど心地よい。
この秋の日差しも僕のお気に入り。
この場所なら太陽の日差しがよく当たる。
程よい暖かさが体を優しく包んでくれる。
あぁ、こうしてじっと座っていると体がだんだん重くなる。
ノアは紛らわせようと体を上下に揺れ始めた。
この動作も自身にとってみては一番楽な体勢なのだ。
まるで揺り籠で揺さぶれられているようで気持ちいい。
・・・なんだか眠くなってきた。
だんだん瞼が重くなり、心地よい睡魔にノアは身を委ねることにした。
徐々に上下に揺れる動作を抑えながら、ゆっくりと・・・

少年期（後書き）

次の投稿は不定期になりそうです・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8085f/

神隠し

2010年10月28日04時35分発行